

起業体験や長期インターンシップがもたらす教育効果に関する考察
—チャレンジプログラム経験者へのアンケート調査結果をもとに—

Consideration on the educational effects of entrepreneurial experience and
long-term internship

- Based on the results of a questionnaire survey of people who have
experienced the challenge program -

片岡 寛之

起業体験や長期インターンシップがもたらす教育効果に関する考察 —チャレンジプログラム経験者へのアンケート調査結果をもとに—

Consideration on the educational effects of entrepreneurial experience and
long-term internship

- Based on the results of a questionnaire survey of people who have
experienced the challenge program -

片岡 寛之

Hiroyuki KATAOKA

<要旨>

本研究では、地域創生学群チャレンジプログラムを経験した卒業生へのアンケート調査をもとに、同プログラムへの挑戦動機、同プログラムを通じた職業観の変容、成長実感などを把握することで、起業体験や長期インターンシップがもたらす教育効果について考察し、その効果として「深い思考の習慣と自己理解」「明確な職業観への変容」「高め合う文化の醸成」という3点を指摘した。

<キーワード>

地域創生学、長期インターンシップ、起業体験、教育効果、テキストマイニング手法

1. はじめに

1.1 地域創生学群チャレンジプログラムをはじめた背景

地域創生学群は、2009年に新たな学部として開設されて以降、地域の再生と創造を担う人材を育成するために、実践と理論の両立を図ることをコンセプトにした特徴的なカリキュラムのもとで、様々な教育機会を提供している。その中でも特徴的なカリキュラムが地域創生実習であり、これは地域等での活動を必修化したものである。このようなカリキュラムを導入した背景の1つとして、大学教育における地域との関係性に対する違和感や課題感が挙げられる。これまでの大学と地域という関係は、あくまでも大学における研究やその専門分野をベースとしており、研究活動を実施する一定期間だけ関係する1つのフィールドという位置付けであることが多かった。そのような従来の大学と地域との関係性を変え、専門分野だけに捉われることなく、多角的な視点から地域課題解決に向けた取り組みを地域と協働で進められるようなカリキュラムを導入することで、大学と地域との間で望ましい関係を構築することができ、そのなかで様々な学びの機会を提供できるので

はないか。そのような考え方のもと、地域創生学群での実践活動がはじまった次第である。

そして、1年生から4年生までの学生が揃うまでの開設から4年間で、地域における実習活動を通して、地域や様々な主体との間で良好な関係性を築くことができ、日常的な学生たちの活動に対する一定の評価をいただくことはできた。しかしその一方で、徐々に課題も見え始めた。そもそも、実習活動は1年次から3年次までとしており、活動を通した学生のステップアップイメージとして、1年次は基礎（地域との関係性構築等）を学び、2年次には活動の継続（チームビルディング、活動の中心的役割を担う等）に必要な事項を学び、3年次には創造的な活動を実践するレベルに到達する、というようなことを想定していた。ところが、実際は様々な要因のもと、3年次の活動レベルが期待していた水準にまで達することができず、全体的に小さくまとまってしまったような印象であった。それまでの間、各担当教員による指導方針や具体的方法等の面で様々な試行錯誤もあったが、この状況を打破するための起爆剤として、学生にとってハードルの高い挑戦的メニューをカリキュラムに組み込み、さらなるステップアップをのぞむ学生向けに実習の代わりとなる機会を提供しようということになった。それが、地域創生学群チャレンジプログラム（以降、チャレプロとよぶ）である。今年度でチャレプロが始まって7年目となるが、その間、チャレプロを通じた学生の成長については、感覚的な部分でしか把握しておらず、詳細な分析は実施していなかった。しかし、2020年度に学内重点予算でチャレプロの紹介冊子を製作できることになったため、その一環で、OBOGに対してアンケート調査を行い、チャレプロを通じてどのような教育効果があったのかを把握することとなった。

1.2 研究の目的

以上を踏まえ、本研究では、3年次のチャレプロを経験した卒業生および4年生へのアンケート調査結果をもとに、チャレプロがどのような面で学生の成長に影響をもたらすのか分析し、チャレプロの教育効果と今後に向けた課題をまとめることを目的とする。

1.3 研究の構成

まず、第2章では、チャレプロの概要およびチャレプロ経験者へのアンケート調査の概要についてまとめる。次に、第3章から第5章では、アンケート調査の結果をもとに、記述式回答についてはテキストマイニング手法を用いて、チャレプロへの挑戦動機と満足度（第3章）、職業観の変化（第4章）、自身の成長（第5章）について分析を行い、それぞれの特徴をまとめる。さいごに、第6章では本研究のまとめを行う。

2. チャレプロの実施実績

チャレプロは、起業トライアルプログラムとリアル就職プログラムの2つのプログラムで構成されており、昨年度までに合計54名（起業トライアル15名、リアル就職39名）の学生が挑戦した。次節以降、各プログラムの概要およびアンケート調査の概要を示す。

2.1 起業トライアルプログラムについて

起業トライアルプログラムは、自ら考えた事業等を長期間にわたって実施するというもので、実施期間の目安は3年次の5月から2学期終了時までの約10ヶ月間としている。このプログラムのポイントは、事業実施に必要なあらゆるリソースを自ら集め、OWNリスクで実施するという点である。これまでの実践例としては、曜日限定のカフェなどの飲食店が多く、大規模なイベントを1からつくりあげて実施したケースや、地域との協働事業を実施したケース、自ら考えたサービスをオンラインで実施したケースなどもあった。

本プログラムの進め方としては、まず企画段階では、学生が考えてきた事業内容に対して教員が助言や企画内容のブラッシュアップを行うことを繰り返して内容を固め、事業の実施段階では、学生からの定期的な進捗報告（活動状況、販売実績、数値目標の達成度など）をうけて助言を行い、事業終了時には事業実績の報告と全体の振り返りを行なってもらうような形式を基本とした。

なお、筆者がプログラムを提供する側として想定していた、このプログラムを通じて得られることは以下の通りである。

- ・ お膳立てがない状態で、リスクを負って事業を行うことにより、座学だけでは気づくことのできない事業の勘所を理解することができる
- ・ OWNリスクで事業を行うことの価値を実感できる
- ・ シビアな金銭感覚を身に付けることができる
- ・ 受動的な仕事と創造的な仕事との違いを理解することができる
- ・ 目的意識の大切さを痛感することができる
- ・ 実践しながら考え、常に改善、検証することの大切さを実感することができる

2.2 リアル就職プログラムについて

リアル就職プログラムは、いわゆる長期インターンシップであり、受入企業・団体等で週3～4日のフルタイム勤務を行うものである。実施期間の目安は3年時の9月から2学期終了時までの約5ヶ月間で、休学せずに挑戦できる点が特徴だといえる。また、有償インターンシップではないが、交通費の実費等を支給していただくようにしている。

受入企業等の業種は多岐にわたり、スタートから6年間で学生を受け入れてくださった企業等は計23社にのぼる。

本プログラムを実施するにあたっては、実践型インターンシップの企画運営を得意とする（一社）フミダスさんに業務委託して、プログラム全体のサポートを担っていただいている。具体的には、インターンシップ開始前にマインドセットのための事前研修（計2～3回）を実施し、インターンシップ開始後は3つの研修（1ヶ月後研修、ギアチェンジ研修、終了研修）を実施していただいている。このような充実したサポート体制も本プログラムの大きな魅力だといえる。

筆者がプログラムを提供する側として想定していた、このプログラムを通じて得られることは以下の通りである。

- ・ 働くことの意味を実感することができる
- ・ 説明会等では分からない企業の日常を体感することができる
- ・ 自分なりの職業観を身に付けることができる
- ・ 就職先を考える際の判断基準が明確になる
- ・ 視野が広がり世の中の厳しさを知ることができる

2.3 チャレプロ経験者へのアンケート調査の概要

本アンケート調査は、チャレンジプログラムによる教育効果を図ることを目的とし、3年次のチャレンジプログラムに参加していた4年生および卒業生を対象として実施した。

アンケート調査の実施期間は2021年2月3日～9日の1週間である。アンケート調査の質問内容はチャレンジプログラムに参加した動機、同プログラムを通じた学びや気づき、職業感の変化や自己の成長などに関するもので、回答形式は選択式と記述式とした。また、アンケートの構成や質問項目の設計については、リアル就職プログラムのコーディネーターをしていただいている（一社）フミダスさんとの協働でおこなった。質問項目一覧を表1に示す。

調査方法はgoogleフォームを利用したオンライン形式で、回答を依頼した4年生・卒業生のうち、31名（4年生8名、卒業生23名）から回答を得ることができた。

2.4 調査結果の分析手法について

前節で示したアンケート調査の結果をもとに次章以降で詳細な分析を行うが、アンケートの回答形式が選択式のものについては単純集計により特徴を把握し、記述式のものについてはテキストマイニングによって分析する。具体的には、樋口¹⁾が開発した文章型データを計量的に分析するためのフリーソフトウェア KH Coder version3.Beta.04a²⁾³⁾を利用し、言葉同士の繋がり方を描く共起ネットワーク図をもとに、記述内容から読み取れる特徴を分析した。なお、共起ネットワーク図に描かれた円の大きさは言葉の出現頻度の多さを示しており、円同士を繋ぐ線の太さは2つの言葉の関連性の強さを示している。⁴⁾⁵⁾⁶⁾

起業体験や長期インターンシップがもたらす教育効果に関する考察
 —チャレンジプログラム経験者へのアンケート調査結果をもとに—

表1 チャレプロアンケートの質問項目一覧

回答形式	設問番号	質問内容
記述	1-1	チャレプロに参加を表明した理由は何でしたか？
記述	1-2	今チャレプロを振り返り、一番の学びや気づきは何だったと思いますか？
選択	1-3	今振り返ってみて、チャレプロをやったよかったと思いますか？
記述	1-4	その理由を教えてください
選択	1-5	チャレプロの経験や、学び気付きは、今に影響を与えていると思いますか？
記述	1-6	そう思う理由を教えてください。(思うの方は、具体的なところまで教えてください)
選択	1-7	チャレプロを後輩に進めたいと思いますか？
記述	1-8	そのように答えた理由を教えてください。
記述	1-9	チャレプロの説明を後輩にする状況だとします。特徴を3つ上げるとすると何だと思いますか？
記述	1-10	①の最後です。ご自身にとって、チャレプロとはどんな場でしたか？
選択	2-1	チャレプロ前後で、働くことについてのイメージは変わりましたか？
選択	2-2	チャレプロ後、働くことに対してどのように思うようになりましたか？
記述	2-3	チャレプロを通して、働くことへの考えは何がどのように変化しましたか？
記述	2-4	変化のきっかけは何だったと思いますか？
選択	2-5	チャレプロを通してどのように働きたいか、将来像に変化はありましたか
選択	3-1	チャレプロを通して、自分は成長したと思いますか？
記述	3-2	上記のように答えた理由を教えてください
記述	3-3	チャレプロを通して、自分のどんな力が伸びたと思いますか？※自由記述、～～力は造語で結構です。
選択	3-4	チャレプロを通して、自身の「失敗する力」は向上したと思いますか？ ※失敗する力：失敗した時の対応力(落ち込み続けるのではなく、学びに変える力、回復力。)
選択	3-5	チャレプロを通して、自身の「当事者創造力」は向上したと思いますか？ ※当事者創造力：目の前の出来事に対し、批判や悪意ではなく、どうしたら良いか自ら考え、提案、行動する力
選択	3-6	チャレプロを通して、自身の「言語化力」は向上したと思いますか？ ※言語化力：自分の感情や想いを言葉にする力。
選択	3-7	チャレプロを通して、自身の「やり抜く力」は向上したと思いますか？ ※やり抜く力：上手くいかないことや、評価されないことがあっても、それから逃げず、向き合い最後までやり通す力。業務遂行力
選択	3-8	チャレプロを通して、自身の「巻き込む力」は向上したと思いますか？ ※巻き込む力：手伝ってくれる人をつくることのできる、人を繋るなど
選択	3-9	今の人生に、チャレプロの経験は活かしていますか？
記述	3-10	上記のように答えた理由を教えてください

3. チャレプロへの挑戦動機とその満足度について

3.1 チャレプロ挑戦の動機

ここでは、チャレプロ挑戦の動機について把握するために、質問1-1「チャレプロに参加を決意した理由は何でしたか？」に対する回答結果をテキストマイニングで分析した。

まず、調査対象となる31名の記述内容における総抽出語数は694であり、異なり語数は227であった。出現回数が多い順番に抽出語を整理(表2)すると、チャレプロ挑戦の動機として、最も出現回数の多かった抽出語は「社会」(7回)であり、「経験」「先輩」(6回)などがそれに続いた。

表2 チャレプロへの挑戦動機として出現回数の多かった抽出語

出現回数	抽出語
7	社会
6	経験/思う/自分/先輩
4	参加/働く
3	学ぶ/学生/見る/行く/今/実習/場所/人/成長/憧れる

挑戦動機に関する共起ネットワーク(図1)をみると、サブグラフ03には、最も出現回数の多かった「社会」が含まれており、「働く」や「学生」と強い共起の線で結ばれていることがわかる。実際の記述には、「働くとは何か。会社とは何か。社会人とは何か。

学生時代にヒントを得られるチャンスだと思ったから。」「学生のうちに社会人を経験できる点」などがあつた。このことから、学生のうちに社会人経験を積みたいという思いが挑戦の強い動機になっていると解釈できる。

次に、サブグラフ 05 には出現回数が 2 番目に多い「先輩」が含まれており、「見る」と特に強い共起の線で結ばれ、「憧れる」とも強い共起の線で結ばれている。実際の記述には、「過去にチャレプロに取り組んだ先輩や働く社会人の先輩フミダスの林さんに憧れたからです」「一年生のときに先輩の発表を見てやりたいと」などがあつた。したがって、身近なロールモデルの存在が挑戦の強い動機になっていると解釈できる。

また、サブグラフ 04 の「経験」は「今」と強い共起の線で結ばれており、「今しかできない経験を積みたかったから」などの記述がみられた。これらのことから、チャレプロという挑戦できる環境を最大限生かしたいという思いが感じられる。

なお、サブグラフ 02 では、「自分」と「人」と「場所」が強く結びついており、「自分自身について深く理解し成長したかったから」「自分の可能性に挑戦したかったから」「同級生がいない場所で新しいチャレンジをしたいと思ったから」などの記述があつた。このことから、自分自身と深く向き合う環境としてチャレプロを選んだことが伺える。

以上のことから、「学生時代に社会人経験を積む」「ロールモデルの存在」「挑戦できる環境を生かす」「自分自身と向き合う」などが主な挑戦動機になったと考えられる。

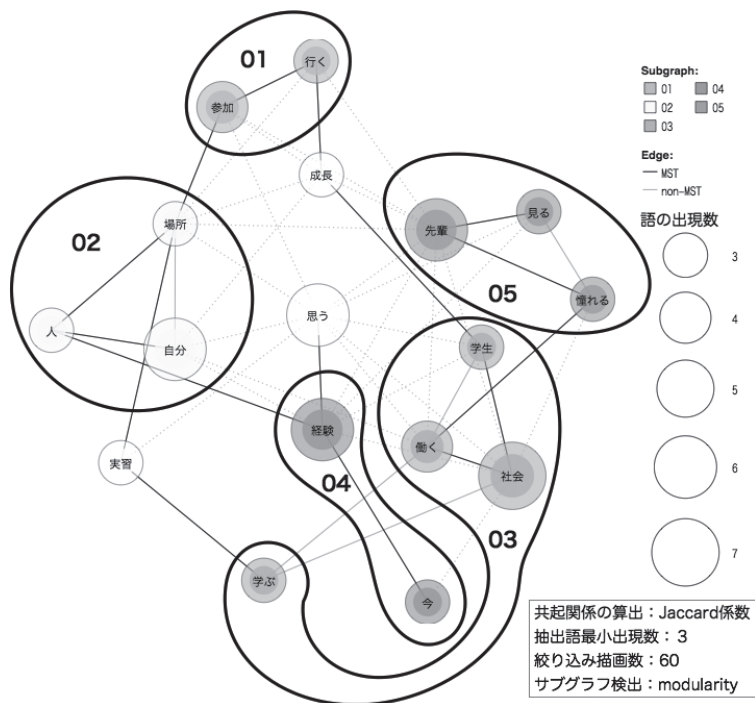


図1 共起ネットワーク (挑戦動機)

3.2 チャレプロの満足度について

質問 1-3「今振り返ってみて、チャレプロをやってよかったと思いますか？」という質問（10段階評価、10点が最高評価）に対する答えを集計すると、平均評価点が9.58（10点：20名、9点：10名、8点：2名）であったことから、チャレプロに対してかなり満足度が高いことがわかる。

一方、その理由（質問 1-4 の自由記述）についてテキストマイニングで分析を行なってみると、抽出語総数は1,431、異なり語数は366であり、出現回数が5回以上の抽出語を整理すると表3のようになった。最も出現回数が多かったのは「自分」（19回）で、「経験」（13回）や「仕事」「社会」（11回）などがそれに次ぐ結果となり、「働く」（7回）や「価値」（6回）なども数多くあがっていた。

表3 頻出語一覧（チャレプロに満足している理由）

出現回数	抽出語
19	自分
13	経験
11	仕事/社会
10	チャレプロ/思う
7	働く
6	価値/学生/考える/今
5	インターン/チャレンジ/プログラム/多い

チャレプロに満足している理由に関する共起ネットワーク（図2）では6つのサブグラフが示された。まず、最も出現回数の多かった「自分」が含まれているサブグラフ 04 では、「働く」が「社会」や「早い」という言葉と特に強い共起の線で結ばれており、「研修」や「フミダス」という言葉とも強い共起の線で結ばれていることがわかる。実際の記述では、「フミダスさんの研修は、働きたいと思っていなかった自分の考えや価値観を良い方向に変えてくださり、勉強になることばかりで、本当にこのような機会に出会えて良かったと思っています。」「社会に出て働くことに良いイメージを持ってなかったチャレプロをする前と比べて、自分がどういう風に働きたいかを明確にすることができたため、早く社会人になりたいと思うことができました。働くことへのイメージが180度変わりました。」などがあつた。このことから、インターンシップでの実践を経験しながらフミダスによる研修を受けることによって、働くことに対するポジティブな価値観を得られたことが満足度を高める要因になっていると考えられる。

次に、出現回数が2番目に多かった「経験」が含まれているサブグラフ 02 についてみると、「学生」と強い共起の線で結ばれており、その「学生」は「貴重」と強い共起の線で結ばれている。実際の記述としては、「多くのつながりが出来て、反省も多かったが学生の時にしか出来ない貴重な経験ができたから。」「学生のうちに、失敗を経験できた

から。」「学生の間に社会人と関わる機会はいい経験になっていると感じているから。」などがあがり、チャレプロを通して学生のうちに貴重な経験ができることが満足度を高める要因になっていると考えられる。

さらに、サブグラフ 01 の「仕事」に着目してみると、この言葉には「今」や「参加」という言葉と強い共起の線で結ばれている。実際の記述では、「この制度を使わなかったら今の仕事の価値観は生まれてなかったと考えるため。」「チャレプロで考えたり学んだことを、今仕事で活かしているから。」「辛いことも多かったが、そこでいかに仕事をするか、仕事につなげるかという姿勢を学ぶことができた。」などがあり、チャレプロへの参加経験が就職後の実際の仕事に役立っているという実感から、満足度が高くなったと考えられる。

以上のことから、学生のうちに貴重な経験ができ、実践や研修で得られた価値観が、その後の社会人生活に活かされているという実感が、チャレプロの満足度の高さを支える大きな要因だといえる。

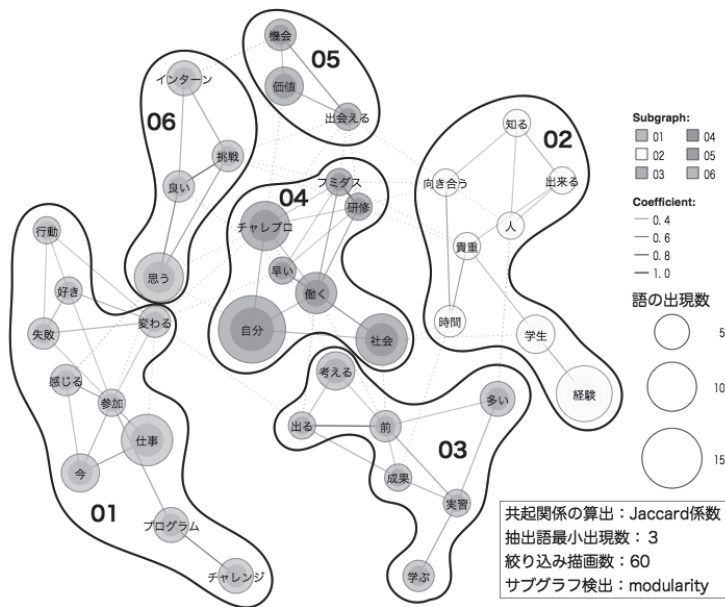


図2 共起ネットワーク（チャレプロに満足している理由）

3.3 チャレプロの印象について

ここでは、チャレプロ経験者がチャレプロに対してどのような印象を持っているのかを把握するために、質問 1-9 「チャレプロの説明を後輩にする状況だとします。特徴を3つ挙げるとすると何だと思いますか？」に対する自由記述をテキストマイニングで分析する。敢えてこの質問を選んだ理由は、ロールモデルとなり得るチャレプロ経験者が先輩として後輩に勧めるシチュエーションを想定した質問であるため、これから挑戦を検討している相手と同じ目線で考えた際に、どのような表現がでてくるかをみることで、チャレプロの

魅力の本質を垣間見ることができるのではないかと考えたからである。

テキストマイニングの結果、総抽出語数は894、異なり語数は317となり、その中から頻出語をまとめると表4のようになった。最も多かったのが「自分」(21回)で、「社会」(12回)や「機会」「考える」「仲間」(8回)などがそれに次ぐ結果となった。最も多かった「自分」という言葉については、実際の記述として「真剣に自分や社会と向き合える」「自分を知る期間」「就活を始める前段階で自分と向き合う場所」などがあり、チャレプロは自分と向き合う場であるという認識が強いことがわかる。

そのほか、この結果から注目したいのは「仲間」という言葉と「考える」という言葉である。前者については挑戦動機や満足の理由の部分では出てこなかった言葉であり、後者については挑戦動機では頻出語にあげられなかったからである。

「仲間」という言葉については、実際の記述として「大切な仲間ができる」「働く場所は違ってもチャレプロメンバーとして一緒に頑張る仲間がいること。」などがあがっていることから、プログラムの内容やそこでの学び以外にも、切磋琢磨する仲間の存在がチャレプロの魅力だと捉えていることがわかる。

「考える」という言葉については、「ここまで『なんで』を繰り返して自分のことを考えることない」という実際の記述に代表されるように、ハードルの高い実践というイメージを持たれがちなチャレプロであるが、実際には徹底的に考えることが求められるという、経験者ならではの視点が示されたといえる。

これらのことから、経験者目線でのチャレプロの特徴は、徹底的に考える場であり、自分と向き合う場であり、かけがえのない仲間ができる場であるといえる。

表4 頻出語一覧(後輩に説明する3つの特徴)

出現回数	抽出語	出現回数	抽出語
21	自分	6	挑戦/働く
12	社会	5	学生
8	機会/考える/仲間	4	インターン/経験/知る
7	場所		

3.4 まとめ

まず、チャレプロへの挑戦動機としては、「学生のうちに社会人経験を積む」「自分自身と向き合う」などの内面的な動機と、「ロールモデルの存在」「挑戦できる環境を生かす」などの外的環境による影響という2つの側面があるといえる。

つぎに、チャレプロへの満足度は非常に高く、その理由として挙げられたのが、学生のうちに貴重な経験ができ、そこで得られた価値観が、その後の社会人生活に活かされている点だということが分かった。

さいごに、経験者目線でのチャレプロの特徴は、徹底的に考える場であり、自分と向き合う場であり、かけがえのない仲間ができる場であるということが分かった。

4. チャレプロを通じた職業観の変化について

本章ではチャレプロに挑戦した経験を通じて、その後の職業観についてどのような変化がみられたのか、前章同様にチャレプロ経験者へのアンケート調査の結果をもとに分析する。

4.1 チャレプロ前後での働くことに対するイメージの変化について

ここでは、質問 2-1「チャレプロ前後で、働くことについてのイメージは変わりましたか？」(10段階：変わらない→とても変わった) および質問 2-2「チャレプロ後、働くことに対してどのように思うようになりましたか？」(10段階：嫌になった→楽しみになった) に対する回答の集計結果をもとに、チャレプロ前後での働くことに対するイメージの変化を探る。集計結果を表5に示す。

働くイメージの変化については平均値が8.26であり、7以上が9割以上を占めていることから、全般的にチャレプロを通じて大きな変化があったといえる。

働くことへの思いについては平均値が8.13となり、イメージの変化と同様に高い数値となり、10が3割を超えている一方で、5以下が1割を超えていることから、やや個人差があることがわかった。この結果については、厳しい現実を知ること、働くことに対して不安を抱えてしまったケースなどが予想される。

なお、質問 2-5「チャレプロを通してどのように働きたいか、将来像に変化はありましたか」(1: 変化はなかった→10: とても明確になった) に対する回答の集計結果は、平均値が8.16となり、7以上が9割を占めていた。

以上のことから、チャレプロを通じて働くことに対するイメージは概ね大きく変化したということがわかる。

表5 チャレプロ前後での働くことへのイメージや思いの変化について

上段:実数, 下段:%	←変わらない										とても変わった→		平均
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10			
働くイメージの変化	0	0	1	0	0	1	4	13	5	7			8.26
	0.0	0.0	3.2	0.0	0.0	3.2	12.9	41.9	16.1	22.6			
働くことへの思い	0	0	1	1	2	2	5	2	8	10			8.13
	0.0	0.0	3.2	3.2	6.5	6.5	16.1	6.5	25.8	32.3			

4.2 チャレプロを通じた働くことに対する考え方の具体的な変化について

前節では、働くことに対するイメージの変化が起こったことが分かったが、ここでは、具体的にそのような変化があったのかを把握する。具体的には質問 2-3「チャレプロを通して、働くことへの考えは何がどのように変化しましたか？」に対する自由記述の内容をテキストマイニングで分析する。

まず、抽出語総数は 1,371、異なり語数は 376 であり、出現回数が 5 回以上の抽出語をまとめると表 6 のようになった。最も出現回数が多かったのは「働く」(23 回)で、「自分」(16 回)や「仕事」(12 回)などがそれに次ぐ結果となった。また、「考える」(8 回)と「考え」(6 回)をあわせると上位に匹敵する出現回数となった。

表 6 頻出語一覧（職業観の具体的変化）

出現回数	抽出語	出現回数	抽出語
23	働く	9	社会
16	自分	8	考える
12	仕事	6	考え
11	思う	5	感じる/人

つぎに、図 3 に示す共起ネットワークを見てみる。サブグラフ 01 には 2 番目に出現回数の多かった「自分」という言葉が「持つ」という言葉と強い共起の線で結ばれており、それ以外には「目標」「大事」という言葉が互いにとくに強い共起の線で結ばれていることがわかる。実際の記述では、「働くことに対して曖昧であまりイメージがなかったが、自分が他人にできることってなんだろう。その観点を持つようになった。」「漠然とした大きなものばかり持っていました、自分の立ち位置と目標を常に照らし合わせる作業が必要と気づきました。」「目の前の課題や目標の為に、成果という形でどう存在価値を出していくことが大事なのかを考えるようになった。」などがあり、表現は様々ではあるが、漠然とした職業観から自分なりの明確な職業観を持てるようになってきていることがわかる。

また、サブグラフ 04 には様々な言葉が含まれており、それぞれが強い共起の線で結ばれているため、いつくか実際の記述をあげてみると、「誰にどんな価値を与えることができるのかを意識して働くことが楽しいと感じるようになった。」「お客さん以外にも価値を提供することもあるということを知り、仕事は働いてお金を稼ぐだけじゃないと考えるようになりました。」「今では、目の前の課題や目標の為に、成果という形でどう存在価値を出していくことが大事なのかを考えるようになった。」などの意見がみられた。これらのことから、仕事を通じた提供価値という面で具体的な職業観が身についたと考えられる。

以上のことから、基本的には漠然とした職業観から自分なりの明確な職業観を持てるようになったと言え、とくに提供価値という面について明確に意識するようになった点が大きな変化だと考えられる。

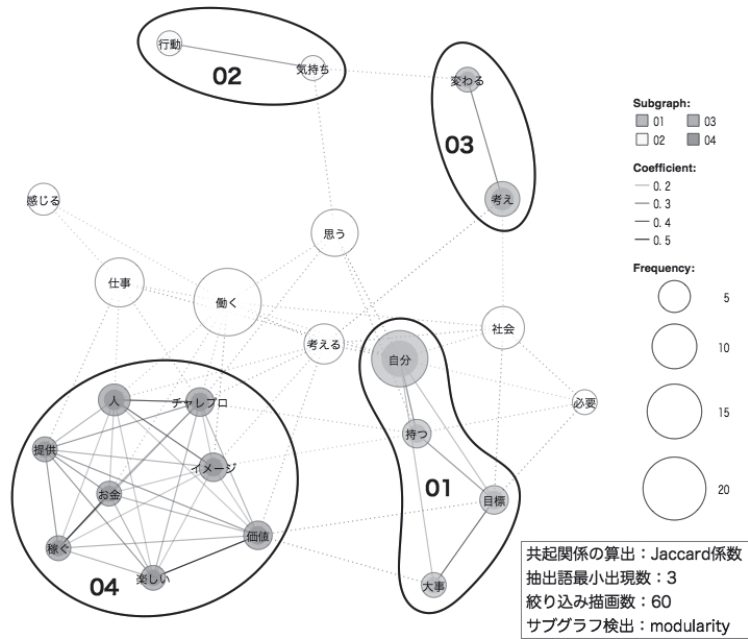


図3 共起ネットワーク（働くことへの考え方の具体的変化）

4.3 働くことに対する考え方の具体的な変化のきっかけについて

ここでは、前節で把握した具体的な変化のきっかけについて把握するために、質問2-4「変化のきっかけは何だったと思いますか？」に対する自由記述の内容をテキストマイニングで分析する。

まず、抽出語総数は848、異なり語数は301であり、出現回数が4回以上の抽出語をまとめると表7のようになった。最も出現回数が多かったのは「自分」(11回)で、「仕事」(10回)がそれに次ぐ結果となった。

表7 頻出語一覧（変化のきっかけ）

出現回数	抽出語	出現回数	抽出語
11	自分	6	チャレプロ/感じる
10	仕事	5	考える
8	思う	4	経験/言う/社員
7	働く		

次に、図4に示す共起ネットワークをみると、サブグラフ01では出現回数の最も多かった「自分」という言葉が他の言葉と強い共起の線で結ばれており、そのほかに「考える」と「経験」が特に強い共起の線で結ばれていることが特徴的である。実際の記述では、「世の中のことを知らない自分の未熟さを痛感したから。」「チャレプロでの様々な経験と

経験の中で応じた疑問点を掘り下げて考えた事によって、自分の軸を持つことができたからだと思います。」「この気持ちを自身の経験から気づけたことが大きかったです。自分でやったからこそ、仕事観と価値観、生き方が繋がっていることを強く体感できたと思います。」などがあった。このことから、チャレプロで実社会の様々な経験を積みながら、考え続けたことで得た気づきが、具体的な職業観の変容に大きく影響していると考えられる。

サブグラフ 02では、「仕事」と「社員」が特に強い共起の線で結ばれており、実際の記述では「まだまだ自分自身の事務スキルが乏しく、これでは仕事にならない!と欠けている部分に気付かされたこと。」「任された仕事まで手が回らず、結局他の社員の方をお願いしてしまったことがあったから。」「周りの大人が何事にも楽しみながら仕事をしているように感じた。」などがあがっていた。これらのことから、実際の仕事を通して自分自身の未熟さを知ったことや、社会人の仕事への向き合い方を近くで感じたことが、具体的な職業観変容のきっかけになったと考えられる。

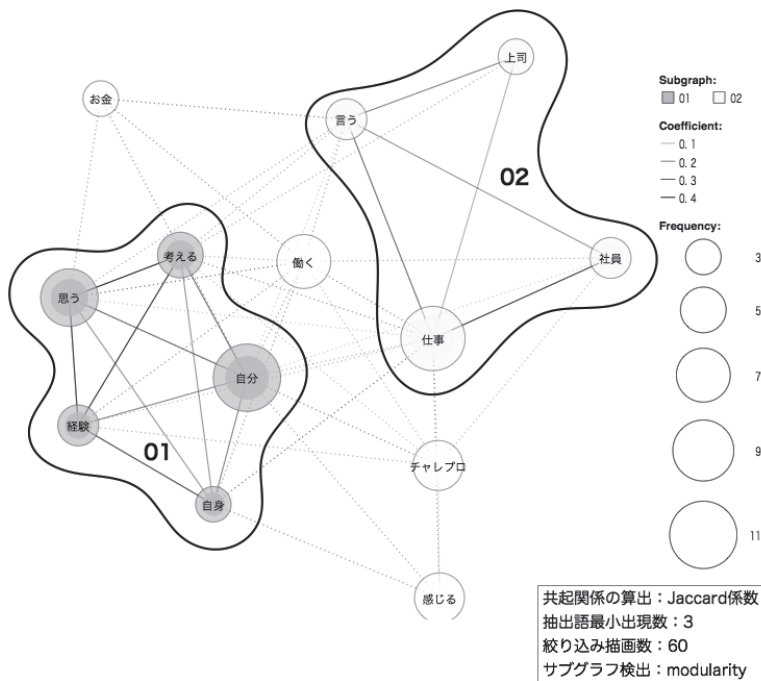


図4 共起ネットワーク（考え方の変化のきっかけ）

以上のことから、チャレプロにおける実社会での様々な経験を通じて、徹底的に自分と向き合った結果、自分に対する理解が深まったことが、具体的な職業観変容のきっかけになっていると言える。

4.4 まとめ

本章ではチャレプロを通じた職業観の変容について、様々な角度から分析を行なった。その結果は以下の通りである。

まず、チャレロを通じた働くことへのイメージの変化について分析した結果、ほとんどの参加経験者は、チャレプロを通じて働くことに対するイメージが大きく変化したことが分かった。

次に、具体的な職業観の変化について分析した結果、基本的には漠然とした職業観から明確な職業観に変化しており、とくに提供価値という面について明確に意識するようになった点が大きな変化だといえる。

さいごに、実社会での様々な経験を積み、その中で徹底的に自分と向き合った結果、自分自身に対する理解が深まり、それが具体的な職業観変容のきっかけになったということが分かった。

5. チャレプロを通じた自分自身の成長実感について

本章では、回答者自身が考える具体的な成長という側面と、あらかじめ設定した能力に対する成長実感という側面から、チャレプロを通じた成長実感について考察する。

5.1 自分自身が考えるチャレプロを通じた成長実感

まず、質問3-1「チャレプロを通して、自分は成長したと思いますか？」の回答結果をまとめた表8をみると、「8」以上の回答が全体の8割を占めており、全員が「6」以上を選択していることがわかる。このように、全員がチャレプロを通じて何らかの成長実感を持っており、その多くがすごく成長したと感じていることから、自分自身の成長につながる満足度の高いプログラムであるといえる。

表8 チャレプロを通じた成長実感

上段:実数, 下段:%	←成長したとは思わない					とても成長した→					平均
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
成長実感	0	0	0	0	0	5	1	10	8	7	8.35
	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	16.1	3.2	32.3	25.8	22.6	

次に、質問3-2「上記のように答えた理由を教えてください」に対する自由記述の内容をテキストマイニングで分析した。総抽出語数は1,165、異なり語数は335となり、頻出語をまとめると表9のようになった。最も出現回数の多かった言葉は「自分」で、「成長」という言葉がそれに次ぐ結果となった。

図5に示した共起ネットワークについて、サブグループ02では、最も出現回数の多かった「自分」という言葉が、「成長」や「経験」と強い共起の線で結ばれている点、サブグループ04では「振り返る」と「機会」が特に強い共起の線で結ばれている点に注目したい。

実際の記述として、「私にとって、人生の糧となる経験ができたことは何よりの成長に繋がったと思います。そして、今の自分の支えにもなっているので自信を持って10にしました!」「今でも成長ノートを見返す事があります。自分に何が足りないのか、どこが長所なのか。赤ペンを入れてもらいながら振り返る機会は、大学生になるとなかなか得られない機会なので、日々の自分を知れたことも成長する上での鍵であったと思います。」「大学2年生までは振り返るなど一切せず、ひたすら走っているような感じでしたが、自分の行きたい方向に行っているのかを確認、振り返る機会を定期的に設けるようにしたことは大きな成長だと思っています。」「どれくらい成長したかは周りが決めてくれればいいが、自分にとってはすごく良い経験になったし、この経験が今に繋がっていると思っている。」などがあつた。これらの内容を踏まえると、単に実践するだけでなく、定期的な振り返りを行い、それに対するフィードバックを得ることの繰り返しによって、自己理解が深まり、結果として成長実感に繋がっていると考えられる。

表9 頻出語一覧（成長実感の理由）

出現回数	抽出語	出現回数	抽出語
11	自分	6	チャレプロ/感じる
10	仕事	5	考える
8	思う	4	経験/言う/社員
7	働く		

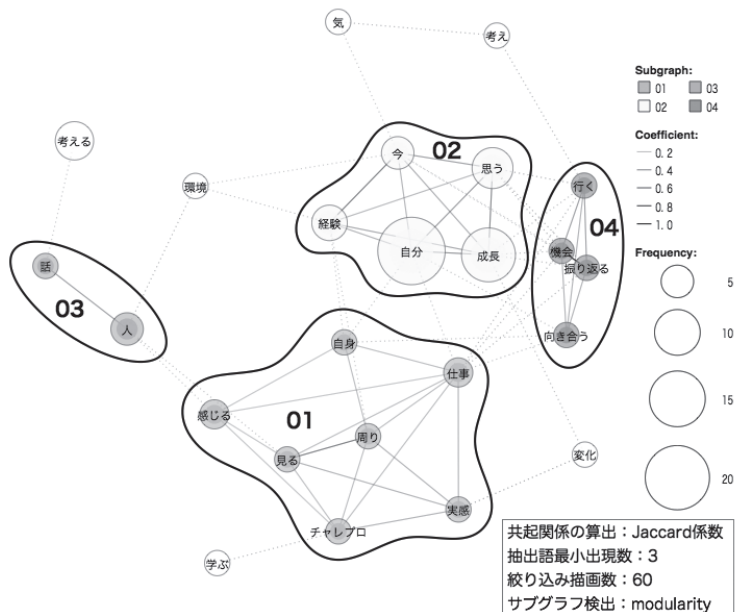


図5 共起ネットワーク（成長実感の理由）

最後に、質問3-3「チャレプロを通して、自分のどんな力が伸びたと思いますか？」の自由記述をテキストマイニングで分析した。実際の記述における表現方法が多岐に渡っており、共起ネットワークによる特徴の把握が困難なため、抽出後の内容をもとに全体的な特徴を把握することとする。その結果、総抽出語数は640で異なり語数は249で、出現回数の多かった言葉（表10）は「力」「自分」「考える」「行動」などであり、「課題」「計画」「実行」という言葉も比較的出現回数が多かった。また、出現回数2-3回の言葉は20種類以上抽出されており、その内容もバラエティに富んでいることがわかる。実際の記述で「～力」という表現されたものを取り上げてみても、「チャレンジする力」「やり遂げる力」「失敗も受け入れる力」「仕事を円滑に回す力」「自分自身と向き合う力」「人に頼る力」「伝える力」「修正していく力」「自発的に考える力」「周りを見る力」など様々であった。このことから、本人の特性とそれぞれが置かれた環境や与えられたミッションとの組み合わせによって成長を感じる部分は異なるということが再認識できたわけだが、どの内容も、実際に職場での仕事や社会での事業を経験することによって実感できる内容だと言える。

表10 頻出後一覧（伸ばした能力）

出現回数	抽出語
22	力
8	自分
6	考える/行動/思う
4	課題/計画/実行/動力
3	コミュニケーション/考/今/仕事/忍耐/能力
2	解決/活かす/気配り/経験/決める/行う/思考/自己 /失敗/実現/生活/調整/伝える/発見/変える

5.2 あらかじめ設定した各能力の向上実感

チャレプロを通じた学生の能力伸長をはかるために、本アンケートの設計段階で、フミダスの濱本氏と林氏と協議を行い、チャレプロ前後で向上することが期待される具体的な能力として「失敗する力」「当事者創造力」「言語化能力」「やり抜く力」「巻き込む力」の5つを設定した。各能力の向上実感に関する質問（3-4から3-7）への回答結果を集計すると表11のようになった。

その結果をみると、どの能力も「7」以上が大部分を占めていることから、全体的に向上実感が高いことがわかる。また、能力別にみると、5つの能力の中で向上実感が最も高かったのが「当事者創造力」（8.61）で、「失敗する力」（8.58）がそれに次ぐ結果となった。その一方で、「巻き込む力」に対する向上実感は、「5」にとどまった割合（16.1%）が若干多かった。

なお、上述の実感値に個人差がどの程度あるのか確認するために、回答者別に5つの能力の平均数値を計算したところ、平均値は8.26、最高値は9.80、最低値は6.40、標準偏差

起業体験や長期インターンシップがもたらす教育効果に関する考察
 —チャレンジプログラム経験者へのアンケート調査結果をもとに—

は 0.96 であった。このことから、総合的な能力の向上実感に大きな個人差はなく、全体的に高い向上実感を得られたのではないかと考えられる。

表 11 5つの能力に対する向上実感

	←向上したとは思わない					とても向上したと思う→					平均
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
失敗する力 ※失敗した時の対応力(落ち込み続けるのではなく、学びに変える力。回復力。)	0	0	0	0	1	1	3	11	4	11	8.58
	0.0	0.0	0.0	0.0	3.2	3.2	9.7	35.5	12.9	35.5	
当事者創造力 ※目の前の出来事に対し、批判や愚痴ではなく、どうしたら良いか自ら考え、提案、行動する力	0	0	0	0	0	2	8	2	7	12	8.61
	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	6.5	25.8	6.5	22.6	38.7	
言語化能力 ※自分の感情や想いを言葉にする力。	0	0	1	0	1	2	6	14	4	3	7.74
	0.0	0.0	3.2	0.0	3.2	6.5	19.4	45.2	12.9	9.7	
やり抜く力 ※上手いかわないことや、評価されないことがあったとしても、それら逃げず、向き合い最後までやり通す力。業務遂行力	0	0	0	0	1	2	4	8	7	9	8.45
	0.0	0.0	0.0	0.0	3.2	6.5	12.9	25.8	22.6	29.0	
巻き込む力 ※手伝ってくれる人をつくることできる、人を頼るなど	0	0	0	0	5	1	6	7	3	9	7.94
	0.0	0.0	0.0	0.0	16.1	3.2	19.4	22.6	9.7	29.0	

5.3 成長実感に関するまとめ

まず、チャレプロを通じた成長実感は全体的に高く、その大きな要因として、定期的な振り返りの機会、それに対するフィードバックの質などがあげられており、それらを通じて自己理解が深まったことも成長実感に繋がっていることがわかった。また、成長を実感した具体的な能力は多岐に渡っていたが、ここでも「考える」という言葉が多く使われていた点が特徴的だといえる。

次に、チャレプロを通じて向上することが期待される5つの能力に関しては、全体的に向上実感が高く、とくに「当事者創造力」や「失敗する力」に対する向上実感が高いことがわかった。また、各能力の総合的な向上実感についても大きな個人差は見られなかった。

6. おわりに

6.1 本研究のまとめ

第2章では、チャレプロの概要およびアンケート調査結果の分析方法について整理した。

第3章では、チャレプロへの挑戦動機とその満足度について分析を行なった。その結果、「学生のうちに社会人経験を積む」「自分自身と向き合う」などの内面的な動機と、「ロールモデルの存在」「挑戦できる環境を生かす」などの外的環境による影響という2つの側面がチャレプロへの挑戦動機となっていることが分かった。また、チャレプロへの満足度は非常に高く、学生のうちに貴重な経験ができる点、そこで得られた価値観が社会人生活に活かされている点などが主な理由だと考えられる。加えて、経験者目線でのチャレプロの特徴は、徹底的に考える場、自分と向き合う場、かけがえのない仲間ができる場であるということが分かった。

第4章では、チャレプロを通じた職業観の変化について分析を行なった。その結果、ほとんどの参加経験者は、働くことへのイメージが大きく変化しているということが分かった。また、職業観については、漠然とした内容から明確な内容へと変化していること、提供価値について意識するケースが多いこと、実社会での様々な経験のなかで徹底的に自分と向き合った結果、自己理解が深まり、それが具体的な職業観変容のきっかけになっていることなどが分かった。

第5章では、チャレプロを通じた成長実感について分析した。その結果、チャレプロを通じた成長実感は全体的に高いこと、定期的な振り返りとフィードバックの機会を通じて考え続けることによる深い自己理解がその要因であることが分かった。また、5つの能力に関しては、「当事者創造力」や「失敗する力」に対する向上実感がとくに高いことが分かった。

6.2 チャレプロによる教育効果に関する考察

チャレプロによる教育効果として明確になったのは5-2で取り上げた5つの能力伸長であるが、本研究全体を通して見えてきたその他の効果として、以下の3点を指摘しておきたい。

1点目は「深い思考の習慣と自己理解」である。チャレプロでは実践内容に注目が集まりがちだが、そのベースとして必要になるのが自己理解であり、それが深まる点が大きな効果だといえる。これは、実践の振り返り、経験の言語化、自己分析、フィードバックを含む定期的な研修の実施によるところが大きいと考えられる。

2点目は「明確な職業観への変容」である。働くことに対してどのような考え方を持っているかで働き方やその質の面で差が出ることは容易に想像がつくが、社会に出る前のタイミングでその部分を明確にしておくことは、その後の社会人生活に大きな影響を及ぼすと考えられる。そのため、学生のうちに起業体験や実際の会社での仕事を経験し、上述した自己理解と合わせて職業観が明確になることが大きな効果の1つだといえる。

3点目は「高め合う文化の醸成」である。チャレプロでは、それぞれが異なるフィールドにおいて1人でハードルの高い実践に挑戦することになる。したがって、壁に直面することもあれば、失敗を経験することもあり、モチベーションの浮き沈みもある。しかし、チャレプロという枠組みの中で同じように挑戦しているメンバーがいることで、そのような苦しい状況の中でもなんとか踏みとどまることができ、切磋琢磨しながらお互いを高め合うことで、強い仲間意識が生まれていることが分かった。そのため、直接的な教育効果とは言えないかもしれないが、このことにも触れておきたいと考えた次第である。

6.3 今後に向けた展望と課題

本研究では、チャレプロ経験者に対するアンケート調査の結果をもとに、チャレプロがもたらす教育効果について考察したが、チャレプロが起業トライアルとリアル就職という

タイプの異なるプログラムで構成されている点は考慮していない。また、アンケート調査のタイミングについても、チャレプロ実施からの経過年数が異なる状況での調査であった。それらのことも踏まえつつ、今後はもう少し踏み込んだ分析を行いたい。

謝辞

アンケート調査の協力依頼を快く引き受けてくださったOB・OGのみなさんに感謝の意を表す。そして、チャレプロ開始時から研修およびコーディネート業務を担い、今回のアンケート調査の設計を協働してくださった（一社）フミダスの濱本伸司氏、林麻貴氏には深謝の意を表す。

参考文献

- 1) 樋口耕一：テキスト型データの計量的分析 -2つのアプローチの峻別と統合-, 理論と方法 (数理社会学会) 19 (1), pp. 101-115, 2004
- 2) KH Coder Web サイト (<https://kncoder.net/>)
- 3) 立命館大学 Web サイト (<http://www.ritsumei.ac.jp/research/radiant/language/story3.html/>)
- 4) 田中信之：初級文法クラスにおける授業引継ぎ - 授業記録の分析を通して -, 富山大学国際機構紀要 (1), pp. 1 - 11, 2018 年
- 5) 水島智史：テキストマイニングによる園芸を学習している高等学校生徒を対象とした園芸生産現場におけるインターンシップの教育効果の分析, 園芸学研究 17 巻 2 号, pp.231-236, 2018 年
- 6) 岩森三千代：KH Coder を活用した自由記述による授業評価アンケートの解析と客観化の試み, 新潟青陵大学短期大学部研究報告 (50), pp.95-103, 2020 年

